

平成 23 年 3 月 4 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2007 ～ 2009  
課題番号：19320103  
研究課題名（和文） 藩政文書・地域文書の体系的分析による前近代日本社会到達形態の解明  
研究課題名（英文） Elucidation of the attainment of pre-modern Japanese society through a systematic analysis of domain and regional documents  
研究代表者  
吉村 豊雄 (YOSHIMURA TOYOO)  
熊本大学・文学部・教授  
研究者番号：90182823

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の基本目的は、熊本大学附属図書館が収蔵する永青文庫「細川家文書」の藩政史料と、県下の惣庄屋・庄屋・在御家人などの地域史料を対応させ、関係史料の重積構造の検討を通して、明治初年に至る19世紀段階の地域社会・百姓社会の到達形態を明らかにすることにある。その際、中心史料としたのは、熊本藩の民政記録「覚帳」である。「覚帳」は、藩庁の民政担当部局「郡方」の記録であり、藩政初期から明治初年に至るものであるが、実は、この「覚帳」は、いわば多様な地域史料を収載している。正確に言えば、宝暦の藩政改革期以降、「覚帳」は、手（郡と村の中間行政区域）・村からの願書・伺書など百姓社会からの上申文書を受理し、これを部局で審議し、回答する部局稟議制の記録帳簿としての性格を強め、明和期になると、「覚帳」は、いわば手永・村からの上申文書を起案書とした稟議制記録となり、19世紀段階には、「覚帳」収載の上申文書は、手永・村から上申された文書の原物が収載されるようになる。こうした解明事実をもとに、吉村・稲葉・三澤は、編者となって『熊本藩の地域社会と行政』（思文閣出版、2009年3月）を刊行した。その上で本研究は、21年度には、「覚帳」において百姓社会からの上申事案の一つのまとまりをなしている「零落所」に着目し、集中的に「覚帳」を解析し、典型的な零落所を対象に本年度の課題に迫ることにした。分析対象として山本郡正院手永、下益城郡廻江手永を選び、個別の零落所救済をめぐる百姓側の上申と藩側の対応策の重層するなか幕末日本社会到達の一つの形態を検出した。

## 研究成果の概要（英文）：

The primary purpose of this research is to clarify the configuration of the attainment of regional and peasant society in the 19<sup>th</sup> century until in the first year of the Meiji Period through an examination of the structure of the accumulation of related historical materials, matching historical materials of domain affairs known as the Hosokawa Family Eisei Archives in the collection of the Kumamoto University Library and regional documents including those of village headmen, landowners and others in the prefecture. *Oboecho*, records of civil administration of the Kumamoto Domain (*han*), served as the documents of central importance at that time. The *oboecho* are records of the *Korikata*, the department within the domain offices that was in charge of civil administration. They extend from the early period of domain administration until the first year of the Meiji Period (1868) and actually contain a diversity of regional historical materials. To be precise, subsequent to the so-called Horeki reform in domain administration, the character of the *oboegaki* was reinforced as records of a circulating collective

decision-making system of the department consisting of the acceptance of reports from peasant society including *negaigaki* (requests) and *ukagaigaki* (questions) from *tenaga* (intermediary administrative districts between *kori* (“counties”) and villages) and villages, deliberation by the department of their content and responses to them. By the Meiwa Period, the *oboecho* had become collective decision-making records with the reports from the so-called *tenaga* and villages serving as drafts and, by the 19<sup>th</sup> century, reports contained in the *oboecho* were recorded as original documents submitted by *tenaga* and villages. Based on this clarification of fact, Yoshimura, Inaba and Misawa, as editors, published the *Regional Society of the Kumamoto Domain and Its Administration* (Shibunkaku Shuppan, March 2009). Moreover, in the present research, I decided to undertake a concentrated analysis of the *oboecho* in FY2009, focusing on trends in administration surrounding *reirakusho* (a type of village), from which originate a group of reports from peasant society in the *oboecho*, and to challenge the issue in the present year targeting the typical *reirakusho*. Selecting Shoin *tenaga* in Yamamoto-gun and Gocho *tenaga* in Akita-gun as the subjects of analysis, I detected one form of the attainment of Japanese society at the end of the Edo Period within the context of overlapping reports from peasants regarding relief for individual *reirakusho* and response measures from domain administrators.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2008年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
年度			
総計	14,200,000	4,260,000	18,460,000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：日本史、地方行政、政策形成、稟議制、地域社会、村社会、零落所

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、本研究の前、平成 11～18 年度に「永青文庫細川家文書の史料学的解析による近世民衆生活・行政実態の比較的研究」という研究テーマで科研費の交付を受け、本研究の主要対象史料群である熊本藩民政史料「覚帳」「町在」について、一定の系統的解析を行い、当該科研費成果報告書に成果をまとめ、また、国文学研究資料館アーカイブス研究系との共同研究報告書『藩政アーカイブスの研究』(岩田書院、2008 年 3 月)にも反映させていた。

(2) 研究代表者は、また、勤務先の熊本大学において、世界的研究拠点化を目指す「熊本大学拠点形成研究」の一つとして採択され

た共同研究組織の代表者でもある。そこでは、研究の中核として、19 世紀熊本藩の住民評価・褒賞記録「町在」の組織的解析を進めていた。そこで、本研究において、熊本藩民政記録として「町在」と対をなす「覚帳」の系統的解析を進め、「覚帳」「町在」に集約される 19 世紀段階の地域社会・百姓社会の到達形態、こうした地域社会・百姓社会に立脚した日本近世の領主制の解明を目指すことにした。

#### 2. 研究の目的

(1) 熊本大学附属図書館に収蔵する永青文庫「細川家文書」の藩政史料と、県下の惣庄屋・庄屋・在御家人などの地域史料を対応さ

せ、関係史料の重積構造の検討を通して、明治初年に至る19世紀段階の地域社会・百姓社会の到達形態を明らかにすることにある。

(2)具体的には、熊本藩の藩政史料のうち、民政記録「覚帳」の、藩制初期から明治初年に至る長期系統的解析を通して、明治初年に至る19世紀に、地域社会・百姓社会＝百姓団体起案文書の稟議制的承認に基づく藩政政策形成の高度化過程を解明することにある。

### 3. 研究の方法

(1)熊本藩の民政記録「覚帳」(400冊、収載事案約10万件)は、藩政初期から明治初年に至る藩庁(奉行所)の民政・地方行政担当部局＝郡方の長期系統的記録であるが、実は、この「覚帳」には、いわば多様な地域史料が収載されている。正確に言えば、宝暦の藩政改革期以降、「覚帳」は手永(郡と村の中間行政区域)・村からの願書・伺書など百姓社会からの上申文書を受領し、これを部局で審議し、回答する部局稟議制の記録帳簿としての性格を強め、明和期になると、「覚帳」は、いわば手永・村からの上申文書を起案書とした稟議制記録となり、寛政末年以降の19世紀には、「覚帳」収載の上申文書は、手永・村から上申された文書の原物が収載されるようになる。

地域社会・百姓社会からの上申文書が藩庁の政策形成の起案書となる、これは大変な事実であるが、こうした藩庁と地域社会・百姓社会との行政関係を実態提示する。また文書データとしても提供する。

(2)同時に、「覚帳」において、地域社会・百姓社会からの上申事案の一つのまとまりをなしている「零落所」に着目し、集中的に「覚帳」を解析し、目録化するとともに、典型的な零落所を対象に本研究の課題に迫ることとした。「零落所」とは、宝暦・天明期ごろから全国的に問題化する「農村荒廃」のことであるが、零落所と農村荒廃は意味するところに違いがある。農村荒廃が、荒廃化する農村状況に対する対応策が立ち遅れ、荒廃を拡大し、飢饉・一揆を生成させているのに対し、零落所には、藩側・百姓側双方に一定の問題認識と対応策の必要性についての認識の共有があり、百姓側は零落所を逆手にとって藩側からの対応策を引き出す名分としている側面が看取される。「覚帳」に個別の零落所救済をめぐる百姓側の上申と藩側の対処策を重層しているのか、その零落所が、どのようにして零落状態を改善していくのか、その政策重積メカニズムを明らかにすることは、幕末の日本社会がいかなる到達形態を画するのか、という課題解明にも通じるも

のである。

そこで熊本藩領の零落所として、その典型をなす山本郡正院手永、下益城郡廻江手永守富在を選び、宝暦の藩政改革期以降、明治初年に至る「覚帳」の収載史料を検索し、その目録を作成する。併せて中山間地域の上益城郡矢部手永、水害常襲地帯の下益城郡鯉手永、熊本城下近郊の零落所・飽田郡五町手永の検索目録も作成し、その比較検討を試みる。

### 4. 研究成果

(1)「研究の方法」(1)については、研究代表者が「江戸社会に生まれた『日本の近代』」(熊本大学文学部研究推進・地域連携員会編『越境する精神と学際的思考』熊本大学文学部、2010年3月)で一定の見通しを提示した。また、本研究の組織を構成する吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽の三人が編者となって『熊本藩の地域社会と行政』(思文閣出版、2009年3月)を刊行した。「覚帳」と対をなす、もう一つの史料群の柱とした「町在」は、日本のものならず、世界的にも類例をみない明治初年に至る19世紀の住民の社会的な行為・事業を評価・記録した帳簿であるが、これは平成20年度までに2万1000件に及ぶ事案の悉皆解析を終わり、平成21年3月に『十九世紀住民評価・褒賞記録「町在」解析目録』(熊本大学附属図書館)を刊行した。

(2)「研究の方法」(2)の零落所に関しては、次のごとき知見を得た。熊本藩の民政記録「覚帳」の分析によれば、零落所問題は18世紀後半、明和・安永期に顕現し、藩庁と手永との間で行政課題化する。手永の成り立ちを地域運営の柱とし、零落所救済に向けて動く過程で手永の地域運営財源が創始され、零落所救済を名分に手永財源の原資となる藩庁の公的資金が取り込まれた。零落所は、手永内の地域格差・経済格差を反映しており、手永が零落所救済に向けて、手永の行政力・資金を投入することで、地域的公共性実現に立脚した手永の地域運営力の高度発達をもたらした。

なお、零落所問題に関しては、本研究の直接の報告書として、『近世における零落所救済の政策重積メカニズム』(2010年3月)を作成した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12件)

吉村豊雄、近代への行政的基点としての宝暦・安永期、文学部論叢、査読無、101号、2010、pp.157 - 178、

吉村豊雄、江戸社会に生まれた「日本の近代」、熊本大学文学部研究推進・地域連携委員会編『越境する精神と学際的思考』熊本大学文学部、1号、査読無、2010、pp.1 - 49、  
吉村豊雄、藩政改革像の再構築、歴史評論、査読有、717号、2010、pp.5 - 20、  
吉村豊雄、中世末・近世における八代妙見祭礼の歴史的展開、『八代妙見祭礼』八代市教育委員会、1号、査読無、2010、pp.159 - 178、  
吉村豊雄、細川重賢、人間会議、査読無、2009年夏号、2009、pp.157 - 163、  
吉村豊雄、近世天草の歴史の再構成、『肥後学講座』熊本日日新聞社、1号、査読無、2009、pp.111 - 144、  
吉村豊雄、日本近世における評価・褒賞システムと社会諸階層、吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編『熊本藩の地域社会と行政』思文閣出版、第1巻、査読無、2009、pp.127 - 199、  
三澤純、幕末維新期熊本藩の「在地合議体制」と政策形成、『熊本藩の地域社会と行政』、査読無、第1巻、2009、pp.259 - 284  
稲葉継陽、熊本藩政と地域社会、『熊本藩の地域社会と行政』、査読無、第1巻、2009、pp.15 - 54、  
吉村豊雄、藩校の時代、『近代への階梯』熊本大学附属図書館、1号、査読無、2008、pp.1 - 4、  
吉村豊雄、通潤橋・通潤用水の歴史的位置、『通潤用水と白糸台地の棚田景観』山都町教育委員会、1号、査読無、2008、pp.35 - 50  
吉村豊雄、近世地方行政における稟議制と農村社会、国文学研究資料館アーカイブス研究系編『藩政アーカイブスの研究』岩田書院、1号、査読有、2008、pp.121 - 206、

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編、思文閣出版、熊本藩の地域社会と行政、2009、412 (pp.127 - 199)  
稲葉継陽、校倉書房、近世社会成立史論、2009、410、  
吉村豊雄、清文堂、幕末武家の時代相、2007、570

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉村 豊雄 (YOSHIMURA TOYOO)  
熊本大学・文学部・教授  
研究者番号：90182823

### (2) 研究分担者

三澤 純 (MISAWA ZYUN)  
熊本大学・文学部・准教授  
研究者番号：80304385

### (3) 連携研究者

稲葉 継陽 (INABA TUGUHARU)  
熊本大学・文学部・教授  
研究者番号：30332860